

「ひ付けたこと忘れたか？」とお仰しやると鳥は不平面をして

「鳥お日様、私は毎日〳〵湖から晩迄門番ばかり

して居ましたから遊びに行つたんです。」と一向

平氣なものです。お日様はそこで

「鳥よし〳〵お前は以來私の家來にはしまい。お

前は今日から免職しよう。何處へでも勝手な處

へ行つてしまへ」とお仰しやいました。そして

鶯や孔雀や鶏をお呼びになつて、お前達は能

云ふことを聞いておつとめをしたから今日は皆

んなにお褒美を遣らう、先づ鶯！お前は唱歌が

大層上手になつたから是から始終歌を唱つて遊

んで居て宜しい。そしてお友達に梅の花を遣ら

うとお仰しやいました」それで鶯は今でも梅の

花の咲く頃になると飛んで来て美しい聲でホーケ

キヨと云ふて唱つて居るのです。それから鶏に

は

「お前には是がよからうとお仰しやつてお日様

のとお奥様が冠ぶつて居らした冠を取つて鶏の

頭に冠ぶせて下さいました。」

それで鶏は今でもきれいなトサカを冠つて居ます
それから今度は孔雀に向つてお前は家中のお掃除
で嘸骨折りであつたらう。それでお前の羽根が大
層よこれたから、其代りにお前にはきれいな羽根
を遣らうとお仰しやいました。」それで今でも孔雀
の羽根はあの様にきれいなのだそうです。併し怠
けたせいでありますすが可哀そうにも鳥だけは何
のお褒美も貰へず、おまけにお日様から勘當され
たので今でもお日様の前には出られせんから、
晝間は木の繁みや洞の中にかくれて居て夜になる
と出て来ていたづらばかりして居ます。何とつま
らないではありませんか。

機織り娘

硯山人

是もまた、怠けものゝ話、或處に大層な我まゝ娘
がありました。姉さん達は朝から晩迄母様の御手
傳ひやら機織りやらで夫れは〳〵忙しい働かた
ですが此我まゝ娘は手傳はふとも云ず、そうかと云

ふて一生懸命に遊んで居るのでもなく、唯ぶらりぶらりと姉さんの機織りを見物したり、母様のお臺所仕事を拜見したりして居ました。

母「お前！ちとお手傳ひおしなさい。」と云ふと「ハア」と氣のない返事をする丈で一向働ら

ともしませんでしめ。

母様はあんまり此娘が怠けるので、しまいにはお怒りになつて或時のこと、大層お叱かりなさいましたので流石の我まゝ娘も泣き出しました。其時丁度其處へ通り掛つたのは何處かのお爺さんです。聞けば娘の聲で、そして大層悲しさに泣いて居たので氣の毒に思つて門の中へ入つて来て見ると、今しも娘が叱られて居る最中です。憐み深いお爺さんは

「ヤレ、可哀さうに、小娘がいたづらでもしたと見えてお母さんに叱られて居るは、ドレ、一つあやまつて遣らうかな。」と一人言云ひながら入つて来て

「ア、もし、おかみさん其お娘が何か悪いことなかつたか、マア勘忍して上げて下され、

私が代りにあやまりませうから、コレ、お嬢さん、あなた！何なかつたぢや、爺があやまつて上げる程に是れからもう、おいたなざるなよ」大層深切な、そして好いお爺さんでありました。

母様は此よいお爺さんに自分の娘の我まゝで怠けるのだと云ふことを知らせるのが如何にも恥づかしく思つたので、お爺さんの前を繕つて

母「いゝえ、外のお爺様！此娘がいたづらをしたのではありませんの！此娘は能く云ふことを聞く娘で、そして機を織ることが好きで、間がない日が始終機ばかり織つて居るのです。それですから少しばかりな糸では逆も此娘の織る丈にも足らないので、いつも糸を買つて」と申しますのですが、私の處は御覽の通り大したお金持でも御座いませぬので、さう、澤山の糸は買へません。それで今日から少し機織をお休みと申しましたので、夫れを悲しがつて泣いて居るのであります。」と答へました。之を聞いたお爺さんは、さも、感心したと云

ふ風で

兼、ソレハ、感心な事ぢや、私はまた、そこの怠け娘と同じ様に、お母様の云ふことでも聞かないので叱かれて居なさるのかと思つたに、是はまた、何とした感心なことぢやらう、さう云ふことなら、何ぢや、私の處へお嬢さん、お出な。私の處では女子どもが少いので、糸がウンとたまつて居るよ。逆も今年の中に織りきれまいと思つて心配して居た處だつたのに、それでは丁度よいと云ふものだ。何うだね、お嬢さん、私の家へ来て思ひ様、機を織つて下さい。ね？夫れが宜い、さうしよう、サア、さうしよう、年寄は氣が短い、善いとなつたら早いがよい、さあさうしよう、ねお嬢さん、嬉れしいだらう。私もさう感心な娘が大好き、怠けものは大々々々々の嫌いだ、サア行かう、支度など構ふものか、何でも早いが一番だ、ドレ出掛よう。お母さん、何うぞ此お嬢さん少し賃して下さいよ。ナニ私が大事にするよ。泣かせたりなんかするものかね。お菓子も上げるよ、ばんも上げるよ、

お好きなら西洋料理でも南京料理でも何でも上げるよ、ハイ左様なら大きにおぢやまさま、と一人で承知して一人返事して嫌がる娘の手を引張つて、お母さんが「マア、おまち下さい」と云ふのも聞えればこそドン、向ふへ行つてしまひました。見て姉さん達は呆氣に取られてけるんとして居ますし、母様は出たらめを云つて、よせばよかつたと思ひましたがモ、追ひつきますせん。話變つて此方のお爺さんは、道々も大層な上機嫌兼、お嬢さんや、お前さんは何と云ふ好いお子ぢやさう云ふお子さんを持つた親御さんが羨ましいね。私はね、まだ子供がないのだよ、夫れだからね、お嬢さん、いやでなければ私の家子にならないか？ね、さうしてお呉れな、私の家のお婆さんはさつとお嬢さんを可愛がるよ！。ナ、何？機が織れない？母さんが出たらめを云つたんだつて？、イーヤイヤ、さうではなからう、お前さんは何でも機が織れるに違ひない。何でも見た所から感心さうな娘だもの！ナニ機が織れないとがあるものか、もし織れない

ければ習つて織る丈のことさ！一向平氣で自分一人で承知して一人ではめて居ました。さうかうする中に向ふにお爺さんの家が見える所に來ました。見れば大きい門構の中に田舎にしては立派な大きな家が建つて居て家り後には白塗りの土藏が何んでも五つ六つ並んで居る様でした。頓がて門の處へ來ると、お爺さんは例の大聲で、其處等に居た下男共に向つて

「オイ權助や御苦勞だがの、お婆さんと呼んで來てお呉れよ、大變感心な娘を連れて來のだから」と云ふとハツと云つて下男が家に入る、入り違ひにお婆さんは曲がつた腰を伸して鼻の先の眼鏡をはづしながら出て來て

「オーオよいお娘だ、何うぞね、たんと織つて下さいよ、糸は幾等でもありますからね。なんとマア惻怍さうな娘だらう。此云ふ娘を持つた親御さんが羨ましいね、」と是もお爺さんそつくりな、一人承知の早合點、流石の我ま、娘も何と返事してよいやら譯が判らない。今更、「同様の云つた事は嘘です。私は大の怠けものです」と云ふ

譯にも行かず、一人で困つて居りました。さうとは知らぬお婆さんは早推了の慰め顔でほくほく悦びながら

「淋しいかね、さう〜姉さん達居なくて淋しいだらうね、けれどもちぎきに淋しくなくなるからね、少し辛棒なさいよ。晩にはね、下男共を呼んでね面白いお話をさせて上げるからね。そして明朝になつたらね、早く起きて皆んなに負けないで働ませうね、」と大層な御機嫌です。

かれこれして居る中に其晩は暮れて皆寝て仕舞ひ我ま、娘は親切なお婆さんと奥の御座敷に寝るところとは寝ましたが、あしたのことが氣に掛かかゝつて寝られませんでした。其中うと〜と寝たかと思ふと、誰れだか耳の傍で何か頻りに話して居るのが聞えます。何かと思つて眼を開いて見ます其處にはなつかしい姉さんが二人して立つて居ました、そして手招きで御出で〜をして居ます。ソットお婆さんを驚かさないう様に起きて行つて姉さんの傍へ行つて「姉さん」と我知らず泣きながら二人の姉



さんにかぢり付くと姉さんもしつかり抱いて暫くは黙つて居ましたが、頓かて、大きい姉さんが姉糸ちゃん、お前は明朝からは意けて居てはいけませんよ、早くお家に歸つて母さんや姉さんに遇ひたければ明日から精々と働いて早く機を織つて仕舞はなければいけませんよと云はれて始めて眼の覺めた様に今迄自分の意けて居たのが悪かつたと氣が付いて、明朝からは一生懸命になつて機を織りませうと覺悟しました。そして夜の明けない中に姉さん達に機の方を教つてしまいました。姉さん達も此様子を見て安心して何時の間にか何處かへ行つてしまひ此娘もついウトウトと機臺に寄り掛つて居眠りして居る所へ起きて来たのはお婆さんです。今しも娘が機臺に寄り掛つて寝て居るのを見て、さも安心したと云ふ様子でニコ／＼しながら

「ア、マア、こんな處に居たの、私はまた何處かへ行つてしまつたのかと思つたら、マア何と云ふ早起だらう、私などは逆も叶はない。感心々々實に感心しました。けれども嬢さんや、

明朝からはこんなに早起しないでもないよ。明朝から私が起きたら起きなさい。夫れ迄は寝て入らつしやいよ」と相變らず親切なお婆さん、此方の居眠りして居たのは一寸も知らない様、流石の意け娘も此處でも恥づかしい思いしながら驚いて目を覺して一生懸命機を織り出しました。根が伶俐な子ですから機も中々上手に織れます。お婆さんもお婆さんも一寸い／＼來ては頻りに感心して居ました。

此様にして一日たち二日たち、遂々一年ばかりたつ中に元の我まゝ娘の意け娘は生れ變つた、はしつこい、意け嫌いのよい人になりました。そして、あんなにたんとあつた糸を皆んな反物に織り上げて、お爺さんやお婆さんの「有り難い、感心だ／＼」とお禮とほめるの、一所さたにしてはく／＼悦んで來る人にも／＼も自慢話やら感心話やらして居る中に漸くのことや或日愈久しぶり自分分の家へ歸ることになりました。所がお爺さんもお婆さんも何うしても家に歸すがいやで仕方がありません。そして二人の云ふには

二人「何うぞお嬢さん私の子になつて下さい。其代りお嬢さんの云ふ通り都合のよい様にするからと云ふので」
 媽夫れでは母様や姉さん達を皆な此家と呼んで下さるなら私は此處の家の子になりませう」と云ふので、二人の老人は大喜び早速皆んなを呼んで来て暮すことゝなり是から家中怠けるものがないくすゝお家が繁昌して行きましたとさ、

めでたし〜〜〜

